

石橋生庵の『家乗』と朝鮮

——紀州藩の儒官李真榮・李梅溪・李清軒をめぐって——

邊 恩 田

はじめに

紀州藩の付家老三浦家に仕えた儒醫生庵・石橋辰章（生庵は号、字・順正、俳号・忍齋）は、『家乗』を記録した。一六四二（寛永十九）年の誕生年から記録が始まり、元禄十（二六九七）年十二月に至るまでの長期間にわたる日記（但し天和二年、三年、元禄七年分は欠冊）である。

その資料的価値については、近世前期の政治・経済・社会をとして紀州藩史のみならず、文学・語学・芸能の諸分野からの先行研究が指摘しているところである^①。

近世文学の方面から『家乗』において注目されるのは、生庵が仕えた主君三浦氏（為時・為隆父子二代）に、経書・史書・文学書などさまざまな書物を「侍読」あるいは「侍講」するという記事が

頻出することであった。また特に、浅井了意作の怪異小説『伽婢子』研究から、生庵が『伽婢子』を「借」りたとする記事に、強い関心が寄せられてきた。

筆者は、前稿^②において、『家乗』に見える、中国の『剪燈新話』と日本の『伽婢子』に関する、本購入の記事と、「侍読」や「侍講」の記事をすべて取りあげ、それらの作品享受の実態と様相について考察し、朝鮮の『金鰲新話』に関する新たな事実を指摘した。

すなわち、『家乗』に、朝鮮王朝初期の文人金時習（一四三五—一四九三）作の漢文伝奇小説『金鰲新話』を、生庵が購入（原文は「沽」の字で、買うの意）した記事があることを報告したのである。

石橋生庵は、紀州藩の儒官である梅溪・李衡正の門生となって学んだ。また後には、梅溪の弟子であり養子となって後を嗣いだ李清軒（川村徳源）に学んだ。生庵が三浦家に仕官するまでの学問は、

師（先生）の学舎「李精舎」の門生となって培われたものであった。前稿では、これらの師や、梅溪の父である李真栄という人物について詳しくとりあげていなかった。

本稿においては、『家乗』記事に頻出する生庵の学問の「師」に着目し、師のもとで学問的研鑽をどのようにすすめ、儒医・侍講として仕えるようになったのか、生庵の記事のなかに具体的にたどってみようとするものである。

以下、まず、それぞれの人物について確認しよう。

一 一陽斎・李真栄

一陽斎・李真栄は、名は一恕^{じゆ}、真栄は字。一五七一年（朝鮮王朝・宣祖五年）、朝鮮国慶尚道靈山（現在の慶尚南道昌寧郡^{昌寧郡}靈山面）の勢力ある士族の生まれ。

一五九二（文祿元）年、豊臣秀吉の朝鮮侵攻「壬辰倭乱」（文祿の役）が始まり、翌一五九三（文祿二）年二十三歳のとき、浅野長政の軍兵（子の幸長の軍ともされる）に捕虜とされ、日本の肥前名護屋（佐賀県東松浦郡、本陣があった所）へ送られ、さらに大坂に移送されたという^③。

その後、異国の地で「流落龍鍾 形单影隻^④」の苦難の歳月を送るが、ついに紀州の久保町に居を定め、私塾を開き子供達に漢学を教

え、また易学を能くしたことから易筮で暮らしていくようになったという。

そして周囲の勧めで、有田郡の旧家宮崎三郎衛右門定直の娘（一六四九）を妻とし、一六一七（元和三）年に長男の全直、一六二一（元和七）年に次男の立卓を得た。

このころ紀州では、いわゆる徳川御三家として「紀州藩」が置かれることになり、一六一九（元和五）年八月十三日に、徳川頼宣（南龍公、家康の十男）が、紀伊・伊勢五十五万五千石を領し初代藩主として入城した^⑤。

そして藩体制の整備と藩政の基礎固めのため有力な家臣、安藤・水野・三浦・久野の四家が、付家老として置かれた。このうち三浦氏は、為春^{なむる}（一五七三—一六五二）が長子^{なむる}為時を連れ頼宣に従い紀州に入ったが、この三浦家に、のちに仕えることになり『家乗』を残したのが、梅溪・李衡正の門生である生庵・石橋辰章なのである。

ここで、紀州藩における藩学について見ておこう。松下忠氏によれば^⑥、その基礎は儒学にあり、「紀州藩の儒学は大局的・自主的」であり、「朱子学も古義学も復古学もすべて自主的に撰取し」、「將軍家にも憚る点が少なく、学問の自由を充分保持し得た」点に特徴がある^⑦とされながら、「紀州の前藩主浅野幸長は、藤原惺窩を慶長十一年以来屢々和歌山に招いて厚遇し、惺窩は何年もの間冬から春

までを紀州で過ごすのを例とし」た事実があり、学問の中心上方（京都・大坂）から著名な儒者たちを招聘・採用した事実があるとされる。

藤原惺窩（一五六一—一六一九）といえは、江戸儒学の鼻祖と言われる人物であり、すでに徳川家康は、一五九三（文禄二）年十二月に江戸城に招き『貞観政要』の講義を聴くことがあり、さらに一六〇〇（慶長五）年には、還俗して儒者の身なりをした惺窩から、『漢書』『十七史詳節』の講義を聴いたという事実があり、注目される。

また惺窩は、一五九七（慶長二）年に捕虜にされ、一五九九年から伏見の藤堂高虎の屋敷に軟禁されていた朝鮮儒学の大家姜沆カンソウに学び、但馬城主である赤松広通の援助とともに、姜沆の朝鮮への帰国を助けている。このとき姜沆は、惺窩に『四書五経倭訓』という注釈書を残したことは特記すべきことで、これは羅山をはじめ広く日本の儒学者に尊重された。

おそらく、紀州藩学の学風が自由で批判的・進取的であるのは、藤原惺窩から受けた学風かと推測され、その影響は紀州にも及んでいたとみられる。

藩主頼宣の代に、この藤門の四天王といわれた那波活所が藩儒に招かれ、羅山の高弟である永田善斎、古義塾の千里駒荒川天散とと

もに、「朝鮮の朱子学者李真栄^⑧」の名が挙げられているのである。

さて、頼宣が入国した一六一九（元和五）年、李真栄は、一三三六字からなる書簡（巻物）を、藩医である竹田慶庵を通して、頼宣に献じている。その文面は、

時維元和五年歲在屠維協洽無射九日嘉辰 朝鮮人李真栄一陽
誠惶誠恐拜手稽首 賦陳上達于

黄門大人閣下^⑨

からはじまる。すなわちその内容は、元和五年九月九日吉日に、誠に恐れ多くも拜手し稽首して、黄門大人（筆者注・藩主頼宣を指す）閣下に献上いたします、として自分の思いを述べるといふものである。紀州藩主の就任を祝し、以下では、中国の漢籍『詩経』『書経』『史記』『漢書』『唐書』等々からさまざま漢詩・中国故事を引きつつ、一国を治める人物が備えるべき徳目について、きわめて具体的に丁寧に説きすすむ内容となっている。

この書は、紀州に住まう李真栄なる朝鮮人が、漢学・儒学を修めた学識ある文士であるその人となり、十分知らしめる内容であったと評価されよう。^⑩

一六二六（寛永三）年、頼宣は、彼を「臣」として迎えようとした。けれども真栄は臣になることは望まなかったため、侍講として仕えることになったという。この時、李真栄はすでに五十六歳であ

った。梅溪は、このことについて、一六五五年来日した通信使への呈書のなかで、

紀州太守である源二品〔徳川頼宣〕がその人となり聞き、厚くもてなしてくれましたが、その臣になることを欲しませんでした。太守もまた強制することをせず、客礼をもって待遇^⑪された、と述べている。

筆者の推測では、朝鮮王朝代に生まれ二十三歳の時まで儒学を修めていた李真栄にとって、「忠臣不事二君（忠臣は二君に事えず）」という〔三綱〕の教えと信条から、日本の「臣」になることを望まなかったであろうと思われる。

以上のように、李真栄は、侍講として紀州藩と藩学の盛業・発展に尽力し、一六三三（寛永十）年六十三歳で没した。

二 紀州藩の儒官、梅溪・李衡正

梅溪・李衡正（全直）は、一六一七（元和三）年、李真栄の長子に生まれた。名は全直、衡正は字、あるいは玄蕃。雅号の「梅溪」が広く知られているが、柏原卓氏指摘のように一六六四年頃から使ったものである。父の号「一陽齋」も名のり、別号に江西・釣岩叟・潜齋・五松軒・隴西・逸民・轟松軒・送雲軒など多い^⑫。

李衡正は、幼くより父親から漢学と儒学を学んだが、一六三三

（寛永十三）年の父没後、当時藩儒であった永田善齋（ながたせうさい）に学んだ。

永田善齋（一五九七—一六六四）。名は正明、のち道慶。字・平安、平庵。号・善齋、石蘊、沕潜）は、藤原惺窩に学び、また林羅山に学んだ林門の秀才といわれる人物で、羅山とともに駿府・江戸に赴き、頼宣の紀州入城に従い紀州藩儒官となった、藩創業の功臣とされている^⑬。

藩主頼宣は、残された弱齡の全直と立卓兄弟を案じ、父の職を受け継ぐよう勧め、白銀二貫匁を与え、全直は京に行き諸儒について学問研鑽に励むことになった。

そして一六三五（寛永十二）年、頼宣は彼を召還し、城中での経書の進講を任じ、また世子光貞（のち二代目紀州藩主）の「師伝」としてその訓育を任せた。こうして李衡正は、父を継いで紀州藩の儒官となったのである^⑭。

一六五五（明暦元）年八月、徳川家綱の將軍襲位を賀して、朝鮮国より正使趙珩、副使兪場、従事官南龍翼の一行四八八名が来日した。『家乗』はこのことについて、

八月朝鮮来聘九月十七日詣日光山（正使名趙珩副使名瑤）
従事官名南龍翼

と記している。

このとき梅溪は、藩主頼宣に随伴して江戸に行き、信使に会っている。書を南龍翼に呈したが、南龍翼が帰国後筆録報告した『扶桑

録』の「聞見別録」には、日本の文士八名について記し置いているが、羅山や林恕と並び、李全直の名が見えている。

さて、李衡正の業績として最もよく知られる一つに、「父母状」がある。

「父母状」というのは、藩内に、子による父親殺しという事件が起こり、その罪人が父親殺しを恥じていないことに嘆いた頼宣の命を受けて、李衡正は日々獄舎に行き、罪人に「孝経」を説き、犯した罪を覚るよう教諭し続けたという。三年におよぶ教戒の効あって、罪人はついに犯した罪を覚るに至った、という。

頼宣は、これを非常に喜び、人倫の大道である「孝」教育の必要性を痛感し、自ら草した訓諭を李衡正に与え作成させたのが「父母状」であった。

父母に孝行に、法度を守り へりくだり 奢らずして 面々家職を守り 正直を本とする事 誰も存たる事なれども 常々下へ教可申聞者也 (二例)

がそれである。

こうして一六六〇(万治三)年正月、頼宣は「父母状」を領内に広く村々まで下付させ、「孝」の教育を奨めたのであった。「父母状」は、以後第十四代藩主の明治初年までも、藩民教育の基本に置かれたとい¹⁵⁾う。

一六六七(寛文七)年五月二十二日、頼宣は病のため隠居し、光貞が二代目藩主となったが、一六七一(寛文十二)年一月、南龍公徳川頼宣は七十歳で没した。

生庵はこのことについて、一六七一(寛文十二)年一月十日条に、申之上刻

前府君薨御于 御新宅

と記している。一年忌の一六七二(寛文十二)年一月八日条に、南龍院殿小祥、御忌見開大法筵于濱中長保弱寺浦天曜寺之両所也と記し、一六七三(寛文十三)年の正月六日条には、南龍院三年忌に關して、

南龍院殿大祥忌之法会有之云

と記している。(付点・引用者。以下同)

これらの記録で重要なのは、「小祥」「大祥」という語である。これが、儒教式の葬後の祭祀であることは注目すべきである。没後一年目に執りおこなう「小祥」、三年目(厳密には満二年目)の「大祥」という儀礼を指す語でもって記録がされており、紀州藩主の葬後礼が儒教式であったことが知られる。

同様に、紀州藩家老であり、生庵が仕えた主君三浦為時(壽量院)についても、『家乗』の記録には、没後一年忌にあたる一六七七(延宝五)年十一月十一日条に、

壽量院殿小祥忌也

三年忌の一六七八（延宝八）年十一月十一日条に

壽量院殿大祥忌也

という記事が見えており、いずれも儒教式の葬後祭祀によったと見られる。

実際のところ、林羅山も、一六五七（明暦三）年正月二十三日に没した際、儒礼をもって葬られているのである。前年に没した羅山の妻も然りであったという。これは、儒字を藩字とした江戸前期の特徴と見てよいかと思われる。さらなる検討を要しよう。

さて、李衡正の著述には、『易学』（一名『一陽軒易学』）をはじめ『東照公年譜』『南龍公言行録』『潜齋雜記』『宮崎文庫記』『徳川創業記考異』など多くある。

なかでも、一六七二（寛文十二）年八月、『徳川創業記考異』十冊を、藩主頼宣公の代から十数年をかけて完成させたことは、重要である。二代目藩主光貞は、これを幕府四代将軍家綱に献じ、栄誉に預かったといわれている。

そしてこの功績によって、李衡正は、五十石追加の三百石を受けて上位の役職につくことになり、梅原別墅を授かった。これは岳父永田善斎が生前使った別邸で、これより「梅溪」の雅号を公的に用いたという。

一六八二（天和二）年十月二十二日 李梅溪は六十六歳で没した。残念なことに、石橋生庵の『家乗』は、この天和二年と三年分が欠冊になっているという。したがって葬礼のようすがどうであったかを知ることができない。

三 李立卓——伊予国西条藩の儒医——

梅溪・李衡正の弟・李立卓は、一六二二（元和七）年紀州生まれ。字は以中、号は三達、のち立卓、また瞻徳。

医学を学び、紀州藩の支藩である伊予国西条藩の藩祖・松平頼純に侍医として仕えた。松平頼純は紀州藩主頼宣の三男であり、仕官には頼宣の配慮があったかと思われる。

李立卓は、晩年紀州に戻ったという。そして一六九六（元禄九）年、七十六歳で没した。その子は宗治郎、高斎と号し、家業をつぎ二代目立卓と称した。

ところで生庵は、『家乗』一六六一（万治四）年正月十六日条に、李氏立卓丈講中庸于水門家予穢末席預聞之

と書き、李立卓丈が『中庸』を水門家で講じるのを、私もこれを預かり聴いたと謙遜しながら記していることから、李衡正先生の弟李立卓からも、学んでいたことがわかる。

李立卓が紀州に戻ったのがいつ頃かについて、一つの手がかりに

なるのは、一六八〇（延宝八）年十一月六日条に、

如中川公訪立卓借医宗必読木子中粹
十冊

とある記事である。生庵は医書の「医宗必読」を立卓から借りたとい、本は十六日に返したとも記している。生庵と同じく儒医であった立卓の手元には医書が多かったであろう。つまりこの時点で、李立卓は紀州に居たとわかる。兄・梅溪が没する数年前には紀州に戻ったようで、兄の死にも立ち会ったと思われる。

四 生庵・石橋辰章の師——梅溪・李衡正——

石橋辰章（以下、「生庵」号はない時期ではあるが生庵と呼称する）の学問において、最初の師は、石川氏であった。一六五二（承応元（慶安五を改元））年十月十九日条に、彼は、

始学大学于石川氏

と記している。初めて『大学』を石川氏に学んだという。彼が十一歳の時である。そしてこのあと、「魯論」「論語」「中庸」を学び、翌正月に「孟子」と続いている記事から、初学者必読の経書である四書から学んでいたことがわかる。しかし石川氏は、一六五九（万治二）年九月二十日に急死し、そのことを「吾師石川氏字李右衛門頓諱良（不詳）卒于松原蜂屋氏門前秋七十五諡宗玉法泉院」と記したなかで、生庵は「吾師」と表現している。

そして翌年、生庵の学問の師となったのが、梅溪・李衡正である。一六六〇（万治三）年三月二十八日条に、

就佐々木氏専衛門初謁李衡正先生川村氏德源丈而為門生

とあり、「李衡正先生」と「川村德源丈」に初めて謁し門生になった、と記している。十九歳の時である。

この入門した年は、前項で述べたように、年初の正月に「父母状」が藩内に配布された年であって、藩主の高い評価を受けた李梅溪の名声が、藩内で非常に高まった頃であったといえる。

さて、入門後、生庵はまず、李衡正先生の『孝経』の講義を、直接学ぶ機会を得ている。

一六六〇（万治三）年六月二十八日条に、次のようにある。

二十八日李衡正先生奉

命而講孝經大義予亦陪末席與聽之

すなわち、「李衡正先生は、（藩主の）命を奉じて「孝経大義」を講じられた。私（予）は、末席に陪してこれを聞いた」という内容となる。「命」の字からの改行は、藩主の「命」に対する敬意の表現である。

ところで、藩主頼宣が「孝経」の講義を李衡正に命じたことは、やはり「父母状」と大きく関わることであったと、筆者は判断する。〈不孝〉を認め〈孝〉を教えることを、藩教育の基礎に置き、「孝

『孝経』を重要視したからである。

ところで『孝経』の講義は、八月十四日に終わったという記事が、十四日条に、

先生講今日孝経終 予不聞一席悉聞聽之

とある。生庵は一席も欠かさず聴いた、とも記している。しかしこの部分、「予」の字以下九文字を小文字で書いたことから、先生に對しての謙讓あるいは卑下の気持ちをあらわした表現とみられ、また、『孝経』の本格的な講義をすっかり学ぼうとする青年生徒生庵の真剣さと意気込みも、読みとれるのである。

そしてまた、『論語』の講義を、一六六五（寛文五）年正月十一日に受けている。

五松軒公讀昼始講論語予亦穢末席

右の記事の「五松軒」というのは、梅溪・李衡正の別号の一つである。この部分、先生は昼に『論語』を講じられ、私はまた末席を穢けがした、という意味になろう。

さて、入門のあと、以降の『家乗』記事には、本の購入、書籍の借覧、読書、そして講義の受講という記事が多く出てくるが、万治四年頃からは、李清軒先生の講義を、多く受けているようである。

このように、学問研鑽を積んだ石橋辰章（生庵）は、いよいよ一六六六（寛文六）年三月十四日に、李衡正先生から、『孟子』の講

義を門生たちにするように命じられることとなった。

先生曰自來十六日応諸生之需而可講孟子由是為考證借孟子備考

同問答

李衡正先生曰く、來る十六日より、諸生の需もとめに応じ『孟子』を講ずべきと、是これに由り、考証を為すため「孟子備考」と「孟子問答」を借りた。といった意味の記事になり、

さらに十六日条には、その結果について、

十六日昼小風 朝僦先生精舍而初講孟子傳史諸生滿座

とも記している。先生の精舎に行き、初めて孟子を講じたことを記しながら、「門生たちが座を満した」という四字を書き足しているのである。この表現に、無事に役目を果たした安堵感や達成感が感じられ、彼の学問的成長もまた読みとれるといえよう。¹⁷⁾

「講」という重要な経験をへた生庵は、いよいよ三浦家に仕えることが決まる。一六六七（寛文七）年九月二十日のことである。

「中扈從」として許されたと記している。そして、二十四日条に

二十四日侍 殿閣

とあり、初めて殿中に侍したという。そしてまた、号を賜ったことを十八日条に、

先生賜名生菴習菴定斎道定明菴呈之鈴木氏請御覽（中略）

公定臣名生菴尚有就先生而可採擇之命

とあって、「先生（李衡正）から生菴、習菴、定齋、道定、明菴の名を賜った。鈴木氏に呈し御覽を請うた。（中略）公（筆者注・三浦為時をさす）は、臣の名を生菴と定められたが、なお先生に行き採扱すべき、という命が有った」という。結局「生菴」の号に決まったわけである。

ところで、ここで留意しておきたいのは、二日前の十二月十六日条に、

十六日 有祝髪之命

とある、祝髪（剃髪）の命があつたという記事である。実際、二十三日に剃髪をしているが、これは、生庵が、〈僧体〉で出仕する、ということの意味する。

日本では、堀勇雄氏によれば、「僧侶の文筆の才能を武家が利用するのは室町幕府時代以来の伝統であつた¹⁷⁾」というところで、また羅山も祝髪をし、「道春」の僧号をもって徳川幕府に任用されている事例がある。

すなわち、儒官ではなく、医者として、儒医として、生庵は出仕したということになる。

したがって、『家乗』のこれ以降の記事において、病状の説明や調査した薬の名、灸治のことが見うけられるのは、このためであり、儒医として生庵が活躍するようすを知ることができる。

五 李清軒——生菴の師——

和泉国泉南郡淡の輪村の川村喜左衛門重治の子である澄淵（徳源、通称名・又四郎）は、一六三六（寛永十三）年生まれ。十五歳のとき紀州へ行き、李衡正のもとで学ぶようになったという。

梅溪・李衡正には嗣子が育たなかつたらしく、門生である彼を養子に迎え、儒者としての教育を授けた。のちの李清軒である。

朝鮮出身の父と日本人の母をもつた梅溪が、両親を日本人とする徳源を後継者に育てあげ、紀州藩藩字のさらなる隆盛のため貢献を続けたということになるのである。

さて生庵は、李衡正先生と養子のこと、藩主の謁見、「清軒」号について、重要なことがらを書き留めている。それは、一六六〇（万治三）年十月六日条の記事である。

十六日与先生之諸門生賀

李精舎此去六日依育子徳源先生此之日更始謁名清軒

太守也

その内容は、「この日、李衡正先生の諸門生たちとともに、李精舎に賀に行つた。これは、去六日さるに、徳源先生が養子となられ、太守（藩主頼宣）に初めて謁見されたことに依る」。

まず原文「李精舎」と「太守」で改行した点に、石橋辰章がいか

に李精舎と藩主頼宣公に敬意をいだいているかがうかがえる。

次に注意したいのは割注である。徳源先生に「この日、名を「清軒」に更めた」という割注を付けたことから、川村徳源がこの日から「清軒号」を用いたことが確認できた。

そして五年後の一六六五（寛文五）年、清軒は、養父の梅溪・李衡正儒官の副として、紀州藩に出仕することになり、父を助けつつもその務めを果たし、一六八二（天和二）年十月に養父梅溪が没したあとは、父職をついでいくことになる。

ただ、祖父の李真栄が用いた号「一陽齋」を襲用し、「一陽」として号したことは、その後の『家乗』記事に、「李一陽」「一陽先生」といった呼称が見えることから確かであろう。

こうして一七〇〇（元禄十三）年五月、李清軒は、紀州藩の儒官であった祖父李真栄と父李梅溪の後をつぎ、紀州藩儒官として仕え、六十五歳で没した。

以上の各項を通して、筆者は、日本江戸初期の「紀州藩」という藩に仕えた儒官たち、朝鮮出身であり朝鮮とゆかりの深い儒官について、彼らと、門生となり儒医となった石橋生庵という人物との関わりや師弟関係などについて、生庵が記した『家乗』の記録を通して、具体的に明らかにしてきた。

『家乗』は、この方面の研究においてもまことに貴重な資料であ

ると評価される。

六 生庵の侍読——『太平記』の場合について——

儒医として、三浦家に仕えることになった生庵は、医者勤めもさることながら、侍読や侍講という「文学的享受」の務めも果たしていた。

加美宏氏は、『太平記』の「侍読」という点に着目され、その享受記事を提示し特徴について論じられた^⑧。『家乗』記事に見える『太平記』享受の事例について、三十二例を提示されたが、それは一六七〇（寛文十）年から一六九七（元禄十）年までの期間になる。とりわけ、灸治の間に『太平記』を侍読させている事実から、数ある軍記物のなかでも、「熱い灸治に耐えながら聞く作品として『太平記』が選ばれている^⑨」と指摘されたのは、生庵が「儒医」であることに照らせば、より興味深いことである。

提示された『家乗』記事のうち、灸治の事例は、次の二点、
灸給膏肓三里之間侍読太平記^{劍卷}（寛文十三年四月五日条）

夜雨 膏肓御灸之中侍読太平記^{卷九}（延宝七年三月五日条）

がそれである。灸をすえる場所、ツボの「膏肓」という語までを記すところなど、まさに生庵の儒医たる知識がうかがえる。

また、『太平記評判秘伝理尺鈔』の享受の事例は、次の一点、

御灸之間侍読太平記評判三十之卷（寛文十二年二月二十日条）を指摘された。^⑤

ここで、『家乗』に見える『太平記』侍読の事例に、補足すべき二例があることがわかったので、次に提示しておきたい。

侍読太平記侍還幸供奉
至末 二六七八（延宝八）年八月十三日条

侍読太平記御息 二六七八（延宝八）年八月十五日条

の記事である。したがって侍読の事例は、合計三十四例となる。

さて次に、本稿がこれまでに論じてきたことと関わる問題になるが、『家乗』記事にしばしば登場する「李氏」という単語について確認しておきたい。

この語がいったい誰のことなのかわかりにくく、具体的に誰をさすのか、という問題である。なぜなら、李貞榮、李衡正、李清軒という三人の人物を、「李氏」と呼称することが可能だからである。

たとえば、貞享三年八月二八日条の記事、

与松田氏如李氏聞宇都宮彦四郎講太平記

にみえる「李氏」というのは、梅溪・李衡正のことではない。なぜなら貞享三（一六八六）年には、梅溪は生存していない。すでに一六八二（天和二）年に没しているからである。ここでの「李氏」は、梅溪の養子である李清軒（もと川村徳源）を指すことになる。つまり、石橋生庵は松田氏とともに李清軒の屋敷に行つて、宇都宮彦四

郎が『太平記』を講じるのを聞いた、という内容になる。

また、寛文十一（一六七二）年十月十二日条の、

持太平記評判而使於精舎先生云此書也近世好事者妄作之其中之典故不足信用焉云

という記事に見える「先生」の場合、ここでは梅溪・李衡正先生を指すものである。そして「精舎」というのは、梅溪の学舎をさす語であつて、『家乗』においては、「李精舎」と記されることが多い。

したがつてこの部分、『太平記評判秘伝理尽鈔』について批評したことは「好事者妄作之」であるとか、「其中典故不足信用」などと云つたのは、梅溪・李衡正先生であつたと見てよい。

以上、『太平記』侍読に関して若干の知見を述べた。

注

- ① 和歌山大学紀州経済史文化史研究所『紀州藩石橋家家乗』（清文堂出版、昭和五九）の資料による。なお原文は「生菴」とあるが、通行の「庵」字に従い「生庵」とする。尾形尙「寸言」儒医の日記から『文学』昭五七年一月号、五八年一月号。土田衛「家乗」芸能記事一覧『芸能史研究』八四号、昭五九。一。長友千代治『紀州藩 家乗』の讀書記事『歴史公論』一一三号、昭六〇。四月。山田和人「報告資料集その一」三浦家文書の会編集、昭六〇。柏原卓『紀州藩 家乗』の表記・文章・語彙『紀州経済史文化史研究所紀要』第五号、一九八五。五。加美宏「形成期の太平記読み——『家乗』記事を中心に——」『国

- 語と国文学』六二卷一、一〇、十一月。長友千代治^{〔紀州藩家老石橋家〕}『家乗』読書記事抄録「近世の読書」日本書誌学大系52、清裳堂書店、昭六二。石川了「『家乗』に見えたる書肆からの借覧本について」『貸本文化』一四号、昭六二。土谷泰敏「儒医石橋生菴にみる近世俳諧の实情——紀州石橋家『家乗』を資料として——」『大阪教育大学紀要（人文科学）』第四二巻一、平五、九。同「儒医石橋生菴にみる近世俳諧の实情（二）」『国文学巧』一四一、一九九四、三。同「儒医石橋生菴にみる近世俳諧の实情（三）」『学大國文』三八号、一九九五、二。江本裕「石橋家『家乗』に見えたる生庵の俳諧活動」『大妻女子大学文学部三十年記念論集』一九九八、三。西岡直樹「日記を書く〈日常〉——紀州藩家老三浦家文書『家乗』を素材として——」『人文学』第一六八号、二〇〇〇、一一。李相熙著・紀の国ハンゲル研究会訳『波臣の涙——紀州藩儒者 李真栄・梅溪父子一代記——』（波臣の涙出版会（李真栄・梅溪顕彰会内）、二〇〇〇、一一）、柏原卓「李梅溪の動静と詩文・補遺」（『紀州経済史文化研究所紀要』第二二号、和歌山大学紀州経済史文化研究所、二〇〇一、三）、西岡直樹「〈日常〉のなかの近世・恋する日々——紀州藩家老三浦家文書『家乗』を素材として——」（『人文学』第一七一、二〇〇二、三）、同「〈日常〉のなかの近世・出仕への道——紀州藩家老三浦家文書『家乗』を素材として——」（『人文学』第一八〇号、二〇〇七、三三）。
- ② 邊恩田「紀州藩石橋家『家乗』と朝鮮文学『金鰲新話』」『同志社国文学』第七六号、二〇一二、三。
- ③ 日本に来てからの李真栄や梅溪については、平岡繁一『紀州藩儒者李梅溪父子資料 上、下』（一九八五）、『李梅溪物語』2（一九九六）、また姜在彦「紀州藩の儒者・李梅溪」（季刊「千里」第46号、千里里社、一九八六、五）、辛基秀「朝鮮と紀州徳川家の交流（一）」（同（二）

- （韓国文化社、一九八六、七、九）、松田甲「紀州徳川家の大儒李梅溪」『日鮮史話』三、原書房（昭二の復刻）、一九七六、江戸末の伊藤海崎編『南紀風雅集』文化一年を参照。なお、注①掲出の『波臣の涙——紀州藩儒者 李真栄・梅溪父子一代記——』は、一九九七年に韓国で出版の李相熙氏著書の翻訳本であるが、和歌山在住の日本の方々による翻訳であることを特記したい。朝鮮王朝代の資料やフィールド調査資料も詳しく、地元の史家平岡繁一氏の『『波臣の涙』日本語出版にあたって』が収まる。参照されたい。
- ④ 注③の姜在彦「紀州藩の儒者・李梅溪」、一八七頁による。
- ⑤ 『藩史大事典』「和歌山藩」雄山閣出版、一九八八、二九九～三〇〇頁。
- ⑥ 松下忠「紀州の藩学」鳳出版、一九七四、一四頁。
- ⑦ 阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会、一九六五、一〇頁。
- ⑧ 注⑥に同じ。
- ⑨ 原文は注①『波臣の涙』一三五頁による。
- ⑩ この書簡について、著者李相熙氏は、「この書簡の一番の核心は、やはり藩主として必要な徳目を説明した部分である」とし、「帝王学」を示すものとされた。注①の翻訳書、一三二頁。
- ⑪ 注④に同じ。
- ⑫ 注①の柏原氏後掲出論一九頁。号は注⑥、二九二頁。
- ⑬ 『国書人名辞典』岩波書店、一九九六。『日本人名大事典』平凡社。
- ⑭ 松田甲氏は、「頼宣は世子光貞の傳として梅溪を尊び、亦た師として之れを敬まつた。實に頼宣と梅溪との関係は最も親密なるものであった。」と述べている。注③の九頁。
- ⑮ 注③の九～一頁。
- ⑯ 鈴木健一『林羅山』ミネルヴァ書房、二〇一二、二〇四頁。
- ⑰ 西岡直樹氏は「諸生満座」について「この日の生庵の「晴れやかな高

揚」を明確に伝えている。」と指摘する。注①の「〔日常〕のなかの近世・出仕への道」論、三三頁。

⑱ 堀勇雄『林羅山』吉川弘文館、昭和三九、二二九頁。

⑲ 加美宏「形成期の太平記読み——『家乗』の記事を中心に——」『国語と国文学』一九八五、一一。のち『太平記の受谷と変谷』（翰林書房、一九九七）に収載。

⑳ 注⑱の一九頁。

㉑ 注⑳に同じ。